

建設を魅せる、現場を識る。

例えばダムや橋梁の現場。人里離れた山間に位置し、人の目には触れにくい。都市部の高層ビルやマンションの現場も仮囲いで閉ざされ、作業の様子をうかがい知ることは難しい。安全確保や情報管理、環境保全のために、建設現場は市民生活から切り離された存在となりがちだ。しかし、隔絶された世界だからこそ見たい、知りたいという声も多く、それに応えて今、建設現場が開かれ始めている。事実、現場見学会は参加募集直後に定員に達し、大規模な現場の状況がメディアで取り上げられる機会も増えている。これらは現場のダイナミズムを体感し、最先端技術に触れることで建設に対する理解を深め、社会基盤の重要性に気付く絶好の機会でもある。建設の神髄を広く知ってもらうための様々な取組みをレポートする。

昼夜を問わず稼働するハッ場ダムの現場（群馬県）では夜の現場見学会が人気を集めている。（写真提供：西山芳一）

どの災害から国土を守るため、古来、日本人はこの自然に働き掛け、川を治め、道を造り、まちを築いてきました。その社会基盤、施設は景観と融合して、観光資源としても十分魅力ある構造物になっています。その機能美、存在感が認識されるようになり、これにじかに触れようと、人々はインフラ整備に目を向けるようになった。

二〇〇七年、観光を日本の基幹産業とすべく「観光立国推進基本法」が施行され、二〇一三年に取りまとめられた「観光立国実現に向けたアクション・プログラム」においてインフラツーリズムという概念が示された。観光資源を再発見、再構築することにより、地方創生、地域の活性化の礎とすることが大きな柱の一つとして掲げられている。それは国内向けの観光振興策としてだけでなく、海

インフラ施設を観光の目玉に

ダムや橋梁、道路といった社会基盤を積極的に公開、開放し、観光資源として活用する。日々の暮らしを支えるインフラそのものを地域固有の観光ポイントに位置付け、これを整備する現場、山奥の絶景を訪ねるインフラツーリズムが人気だ。地域の活性化、まちづくりを目的とした取組みだが、インフラの重要性を再認識し、最先端の建設技術に触れる貴重な機会としても注目を集めている。その背景について、国土交通省総合政策局公共事業企画調整課の吉田邦伸事業総括調整官にお話を伺った。「日本は緑豊かな美しい国土を有していますが、その七割ほどが山岳地帯です。地震や台風、豪雨な

宮ヶ瀬ダム観光放流 (神奈川県)



湯田ダム「錦秋湖大滝」 (岩手県)



秘境八十里越体感バス・橋梁見学 (新潟県)



秘境八十里越体感バス (新潟県)



特集 建設を魅せる、 現場を識る。

ーが増えています。そうしたなか、ダムなどの絶景は、人々の心に響く風景として捉えられている。『非日常』の風景のなかで、『本物』を目の当たりにする。それはインパクトのある体験だと思えますよ」と吉田調整官は話す。

更に、その絶景はSNSなどで瞬く間に拡散する。インスタ映えする美しい写真は、時間と費用を掛けてでもその場に立ってみたいという興味を強く刺激する。

「安心、安全な暮らしの実現に向けたインフラが、これほど注目を集めることはかつてなかった。観光立国という国の施策が追い風になったとはいえ、その背景には様々な複合的要素があるようにも思える。吉田調整官はこう語る。

建設の技術、意義を 次代に伝えたい

「安心、安全な暮らしの実現に向けたインフラが、これほど注目を集めることはかつてなかった。観光立国という国の施策が追い風になったとはいえ、その背景には様々な複合的要素があるようにも思える。吉田調整官はこう語る。

「安心、安全な暮らしの実現に向けたインフラが、これほど注目を集めることはかつてなかった。観光立国という国の施策が追い風になったとはいえ、その背景には様々な複合的要素があるようにも思える。吉田調整官はこう語る。



国土交通省 総合政策局
公共事業企画調整課
事業総括調整官
吉田邦伸
Kuninobu Yoshida

外から訪れる観光客も視野に入れた取り組みでもあった。「日本の特徴ともいえる自然と調和したインフラ施設は世界に誇る先進的な建設技術、環境性能の象徴ともいえます。こうした構造物は観光の資

心に響くインフラ構造物

人知れず日々の暮らしを支えてきたインフラが、これほど注目を集めることはかつてなかった。観光立国という国の施策が追い風になったとはいえ、その背景には様々な複合的要素があるようにも思える。吉田調整官はこう語る。

源としても大変貴重な存在だと考えています」と吉田調整官は話す。

全国各地で開催される インフラツーリズム

国土交通省はホームページでインフラツーリズムポータルサイトを開設し、四半期ごとの旬なツアー情報を発信している。そのコンテンツは民間ツアーも含め423件に達する。

インフラツーリズム 最近の動向 (国土交通省提供資料を基に作成)



インフラツーリズムの開催は年を追うごとに増加傾向にある。民間主催のツアーも増えており、地域のインフラ構造物が観光資源として十分な価値を有することが認識されてきた。しかし、紅葉シーズンなどに人気が集まり、冬季の開催が落ち込むこともある。季節ごとの旬なイベントと組み合わせるなど、参加者誘致のアイデアが各地で展開されている。

首都圏外郭放水路 (埼玉県)



瀬戸大橋スカイツアー (香川県)





ハッ場ダムは首都圏で唯一の大型ダムの建設現場だ。周辺に展望台は設けられているものの、その存在感を体感できるのは、普段は閉ざされている現場内の風景を間近に目にした時だ。旅行会社の団体ツアーや個人旅行にも柔軟に対応する体制整備がリピーターの獲得につながっている。



ハッ場ダム工事事務所

ダム現場のインパクトを体感

特集 建設を魅せる、現場を識る。

ルジュラと相談して、特に大勢になるときは二班で対応するなど工夫をしながら、今までに断ったことはありません。もちろん一名様でも開催します」。

取材当日のぶらっと見学会も猛暑日にも関わらず五〇名超の参加者が集まり、コンシェルジュの解説に真剣に耳を傾けていた。個人向け見学会にはこのほかにも宵闇に浮かび上がる幻想的な夜景

を堪能する「土曜の夜の現場見学会」、ハッ場ダムを応援するメンバーからなる「ファン倶楽部見学会」など五つのバリエーションがあり、どのプランも好評だ。「見学会に参加してくれた子どもたちの目がキラキラしている。お子さんに『将来こんなすごいものを作る仕事もいいんじゃないか?』と話し掛ける親御さんも見かけます」と遠藤副所長は相好をくずす。

「いまだけーんこだけ!」の現場見学会

JR高崎駅から車で一時間ほど北上した群馬県長野原町の静かな山間に展開するダム本体工事現場。ハッ場ダムの建設現場は交代制で昼夜を問わず二四時間稼働する。ハッ場ダムはおよそ七〇年前のカスリーン台風による被害を教訓として一九五二年に「利根川改修改訂計画」の一環として調査が始まった。その後、紆余曲折を経て二〇一四年にダム本体工事着手、来年度の完成に向けて着々と工事が進展している。工程はまさにクライマックスだ。

今、この建設現場の見学会が大きな注目を集めている。その名も「やんぼツアーズ」。首都圏で唯一のダム現場をリアルに体感するインフラツーリズムだ。「始まった



国土交通省
関東地方整備局
ハッ場ダム工事事務所
副所長(技)
遠藤武志
Takeshi Endo

一方、団体向けのプランは予約制になっている。観光バスによる団体ツアーを想定したメニューを用意した。一般の来訪者向けの「コンシェルジュ御案内ツアー」、土木技術者向けの「最先端技術見学会」をはじめ、小学生を対象とした教育プログラムや訪日外国人向けのインバウンドツアーなど、こちらも五コースを用意した。「行政視察や技術見学会は所長、副所長等で対応させていただきますが、基本的な案内役は地元で採用した六名のコンシェルジュたち

のは昨年の四月。大変な人気で現在一〇本の見学プランを実施しています。昨年度は二・九万名の方が参加されているんですよ」と説明してくれるのは国土交通省関東地方整備局ハッ場ダム工事事務所の遠藤武志副所長だ。

見学プランは個人向けと団体向けの二つに大別される。個人向け見学会で人気なのは「ハッ場ダムぶらっと見学会」だ。木曜日以外の平日は一日二回、休日は五回、四〇分ほどの見学会を開催する。「気軽に参加していただくという事で予約は不要にしました。集合場所まで受付をして、コンシェルジュが現場をご案内します。色とりどり、一〇色のカラーヘルメットを選んでもらい、これが好評で、老若男女を問わず、よりダム現場を身近に感じていただけていると思います」と遠藤副所長は話す。スタート当初は四〇名程度の定員を設定した予約制だったが、参加希望者が四〇名以上になることが多く、時には一〇〇名にもなった。現場に対する関心、興味は予想以上に高かった。「コンシエ

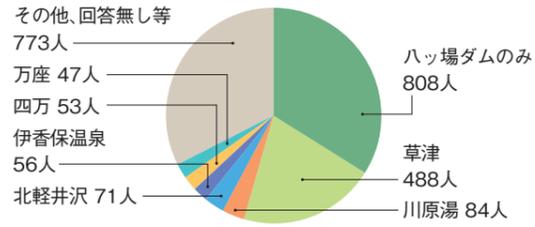
です。整備事業の大切さを楽しみ、分かりやすく説明してくれます。やんぼツアーズの合言葉は『いまだけーんこだけ!あなたただけ!』。動いている現場を見ることができるとは本当に今だけです。その貴重な体験を彼女たちが後押ししてくれています」と、遠藤副所長は胸を張る。地元の若者たちがコンシェルジュに名乗りを上げ、地域の魅力をその土地の言葉で語り掛ける。参加者にはダムのデータや工法に関わる知識以上のものが伝わっているに違いない。この秋



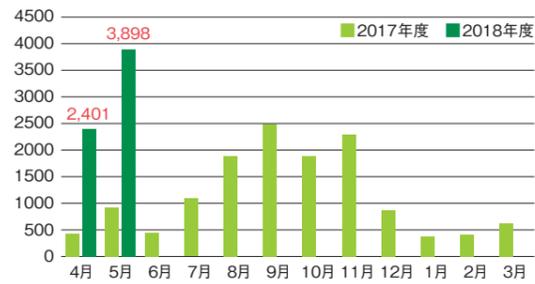
見学者はヘルメットの着用が義務付けられているが、子ども用を含め10色の中から選べるカラーヘルメットが人気だ。10月からは地元主催の有料ツアー「プレミアム見学プラン」を国として全面的にバックアップする施策をスタートさせる。

特集
建設を魅せる、
現場を識る。

現場見学会以外の目的地について



個人向け現場見学会参加者数



アンケートによると、「やんばツアーズ」に参加した理由として、ハッ場ダム見学のみを目的とした参加者が約3割で最多だった。一方、草津温泉をはじめとする周辺の観光スポットを巡りながら訪れる参加者もほぼ同数に達する。竣工後の回遊性を高めることで持続的な展開が期待される。また、参加者数の推移を見ると2018年4月以降、予約不要の「ぶらっと見学会」を開始したことにより急増しており、前年同期の5.5倍に達した。(国土交通省関東地方整備局の資料を基に作成)

「この興味をいかに広範囲に拡大していくか。これが課題にもなる。ハッ場ダム工事事務所として群馬県を始めた行政に働き掛けて広報を強化している。県が保有する東京・銀座の広報施設や、赤坂の県事務所には広報、パンフレットを設置している。東京都水道局が視察に訪れた際にも協力を仰ぎ、同局のスペースを借りてパンフレットを設置しているという。「工事事務所はダムが竣工した後、管理に移行します。その時に、現行の広報体制を維持することはそう簡単ではありません。最大限の道筋をつけようと国としても努力をしていますが、完成した後は地元の方々が主体的に取り組むことが必要になります」。

そうした背景から始まった取り組みが「チームやんば」の活動だ。地元・長野原町の旅館や酒蔵を営む住民と地方自治体、国が連携して結成した任意団体で、積極的に見学会を展開している。「地元の方々が『あのあたりが昔住んでいた場所』『あそこの溪流でよく川遊びをした』とご自身の言葉で案内してくれます。役所の人間には難しい語り掛けや、新しい発想が生まれてくる。四七〇世帯もの

駅のレストランではダム湖に見立てたユニークな「ダムカレー」が一番人気だ。「資料館や道の駅にはスタンプを設置して、スタンプラリーの達成者にダムカードを呈呈しています。ハッ場ダムのカードは現在五代目で、初代からすべて集めている方もいらっしゃるようです。ダムカレーもそうですが、そうした取り組みでも再訪を促したいと考えています。ダムカードや唐揚げが五〇円引きになるお店もあるんですよ」と遠藤副所長は笑顔で話す。

ハッ場ダムを訪れるリピーターは群馬県内をはじめ、やはり近隣の市民が多い。地元で一大施設が整備されるため、その進捗、工程を見守りたいという気持ちがあるのだろう。この興味をいかに広範囲に拡大していくか。これが課題にもなる。ハッ場ダム工事事務所として群馬

竣工後を見据え、
持続的な展開を

県をはじめ行政に働き掛けて広報を強化している。県が保有する東京・銀座の広報施設や、赤坂の県事務所には広報、パンフレットを設置している。東京都水道局が視察に訪れた際にも協力を仰ぎ、同局のスペースを借りてパンフレットを設置しているという。「工事事務所はダムが竣工した後、管理に移行します。その時に、現行の広報体制を維持することはそう簡単ではありません。最大限の道筋をつけようと国としても努力をしていますが、完成した後は地元の方々が主体的に取り組むことが必要になります」。

方々が移転されて、このダムがある。そうした歴史も語り継がれていくと思います。今後こうした取り組みが更に広がっていくと嬉しいですね」と遠藤副所長は将来への思いを語る。

ハッ場ダムがある長野原町は、北は草津、万座、南に伊香保、軽井沢と、温泉やスキー場などに囲まれている。町内も川原湯温泉や吾妻渓谷など観光資源に恵まれている。地域の回遊性を高め、そのコースにハッ場ダムが加われば、持続的な地域振興につながるのではないかと、これからは紅葉シーズン、吾妻渓谷の錦繡は、それは立派なものです。山間に忽然と現れるダム湖に映える絶景は地域の財産になるでしょう。建設中の現場を訪れた方も、必ず二度、三度と足を運んでくれるはずですよ」と、遠藤副所長は期待を寄せる。

観光による地域振興に、インフラ構造物が大きな役割を果たす。その経緯を通して社会基盤の重要性、建設業の意義を伝える、そうした取り組みがハッ場ダムから広がっていく。



ハッ場大橋から望むハッ場ダム上流サイドの全景。竣工時にはこの一帯はダム湖の湖底に沈む。今しか見ることのできない風景だ。見学会には、ダム築造に関わる土木技術、社会基盤の重要性を広報するとともに、ハッ場の歴史や文化、建設の経緯も語り継いでいくことが期待される。

以降、これらのプログラムは更にパワーアップして再スタートする。多彩なメニューで再訪を促す

見学会の集合場所は、昨春にオープンした建設現場に近い川原町湖畔公園の駐車場だ。ここに隣接する右岸の展望広場からは迫力ある現場の全体像を一望できる。対岸にも無料の展望施設「やんば見放台」がある。こちらの来訪者は二〇一五年の公開から三五万人を超えた。一〇万人目、二〇万人目、三〇万人目の来訪者には記念品が贈呈され話題になったという。

現場一帯には、展望台以外にも、見学会に参加せずともダムについての情報を得ることが出来る広報

施設が点在する。ハッ場大橋のもとに開設されているのは「なるほど!ハッ場資料館」だ。現場周辺を俯瞰できるジオラマを中心に、パネルや映像によって現場の現況や工法を知ることができる。見放台とは同時期の開設で、こちらの来訪者は一〇万名に達した。中核的な施設であると同時に無料の休憩施設としても開放されている。また、資料館から車で一〇分ほど離れたところにある道の駅「ハッ場ふるさと館」にも情報センターを設置し、壁一面に大きく掲げられた説明パネルとジオラマに多くの観光客が目を留めている。ここにもコンシェルジュが常駐しており、丁寧に対応していた。道の



「なるほど!やんば資料館」(上・中)と、道の駅ハッ場ふるさと館の「情報コーナー」(下)

延長約二四キロメートルに広がる
現場情報を一元的に発信

今年四月、神奈川と静岡の県境付近にある新東名高速道路の建設現場に、この事業の広報を目的とした情報拠点「新東名山北事業PR館」(神奈川県足柄上郡山北町)がオープンした。場所は国道二四六号線から丹沢方面に一キロほど北上した山間にある河内川JV工事事務所の一部。その事務所自体も、地元の特産品を集めた「道の駅山北」や、オートキャンプが楽しめる「河内川ふれあいビレッジ」といった施設に隣接し、ウッドパネルを施された外観も開放感に満ちている。「山北事業PR館は新東名高速道路のなかでも、弊社の秦野工事事務所管内で行われている工事の紹介、解説に特化した広報施設です。管内の現場延長は約二四キロメートルもあり、険しい山道を歩いて回るのはちよつと難しい。ある程度の全体像はこのPR館で把握していただけます」と案内してくれたのは中日本高速道路(株)(NEXCO中日本)の川治晃工務課長だ。

新東名山北事業PR館

日本の大動脈を
造る現場



新東名山北事業PR館は河内川JV工事事務所の一部に開設された。ウッディな外観は従来の工事事務所の趣とは一線を画す(右下)。明るく開放的な館内では、山北町内にある4カ所の工事の概要や、国内最大規模で東日本では初となるバランスドアーチ橋、河内川橋(中下・完成予想図)の施工技術についてナビゲーターがジオラマや映像で解説する(上・左下)。

要を一元的に発信する施設として設置された。

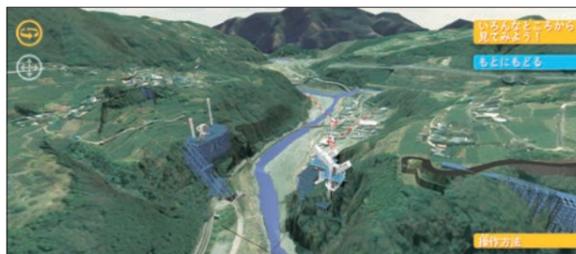
開設当初は予約制だったが、現在は火・水・金の午前10時から午後三時まで開館、土曜日の午前中はナビゲーターが常駐している。「開館日以外でも事前にリクエストがあれば開館します。ナビゲーターも複数名控えていますので柔軟に対応することが出来ます。周辺にはレジャースポットもありますから気軽に訪れていただきたいですね」と川治課長は話す。

VRツールから積み木まで

館内の中央にはジオラマが置かれ、管内の位置関係を知ることが



IT技術を駆使したVRゴーグルやタブレットから、昔懐かしい積み木まで、感覚的に土木技術を理解する工夫が随所に見られる。



河内川橋施工プロセスCG(提供:中日本高速道路(株))

できる。その周りにはタブレットが配置され、施工ポイントごとのデータはこの端末で得ることが出来る。画面をタップすると地上から鳥瞰まで視点を自由に変えることができ、現場を見下ろすことも可能だ。目の前のジオラマと見比べながら、文字通り立体的に各工区の概要を把握することができた。今年の四月に入社しナビゲーター役も務める柳川真穂さんがタブレットの操作を教えてくださいました。「現場だとスケールが大きすぎて

イメージをつかみにくいかもかもしれません。このCG動画だとそのプロセスを視覚的に理解出来ます。まだ私も操作に完全に慣れているわけではないんですけどね」と笑った。一生懸命説明してくれる様子が微笑ましい。「まだまだ技術的なことを勉強中ですが、分からないことがあるということは、一般のお客様と視点が近いということでもあると思います。それは今の私の強みかなと。一方的に説明するのではなく、こういった言葉、

特集
建設を魅せる、
現場を識る。

中日本高速道路株式会社
東京支店
秦野工事事務所
工務課長
川治 晃
Akira Kawaji



NEXCO中日本のオリジナルキャラクター「みちまるくん」(右)は、高速道路空間の「安全・安心」「快適さ」「楽しさ」を伝えるシンボルとして人気を集めている。また、東名高速道路(東京IC~小牧IC)は、来年全線開通50周年を迎えることから、NEXCO中日本は記念ロゴマークを開発。東名高速道路を一筆書きしたラインと、富士山、太平洋のブルーのイメージからなるこのロゴマークは、今後開催される周年記念イベントや印刷物で展開される。(提供:中日本高速道路株)



祭りイベントのブース(提供:中日本高速道路株)

言い方をすれば伝わるのか、常に考えています」と話してくれた。

同じく案内係の板橋沙季さんもこう話す。「私も技術的なことはまだまだですが、一般の方には事業の意義、技術者の方々には施工技術の詳細な解説と、ニーズに沿ってご案内できるようにしたいですね。お客様のなかにはお子さんも多いですから、いずれにしても、分かりやすく説明することが何よりも大切だと思っています」。VRゴーグルも人気を集めるツールだ。装着すると今まさに現場に立っている感覚を疑似体験できる。顔を上空に向けると施工中の橋が視界一杯に広がった。

トンネルを模した木製の積み木で、子どもたちは、地山とこれを支えるトンネルの構造を単純明快、直感的に理解できる。「お子さんたちが自身の興味を自由に膨らませるきっかけになるといいんですけどね」と川治課長は目を細める。奥の壁面には大型モニターを設置、映像を交えて説明できるスペースとした。映像素材は、事業概要の解説から技術説明まで、来訪

者の目的に合わせて複数のコンテンツを用意している。

また、四工区それぞれの進捗を報告するコーナーもあり、こちらは各JVが定期的に写真などを更新、最新の情報を公開している。

川治課長に改めてこのPR館の目的について聞いた。「幅広く、そして一元的に事業の重要性をご理解いただくことはもちろんですが、やはり地域間交流を深めるという目的も大きいですね。私たちの事業は地域と交流、協働しなければ達成は難しい。地域に向けた貢献活動にしっかりと取り組んでいこうと。PR館には地元の皆さんに理解を促していくという大きな目的があるんです」。事業PRの広報コーナーは、ここ以外にも神奈川県公共施設の一部にも展示を考えている。地域の情報とともに、新東名高速道路の意義を伝えるも一つの拠点となるだろう。

地域との交流を深める 広報活動

秦野工事事務所はこのPR館が開設される以前から見学会やイベ

ントを積極的に行ってきた。昨年度も六一回にわたって現場を公開合計でおよそ一、九〇〇名もの見学者が訪れた。現場では埋蔵文化財が発掘され、その調査の様子を合わせて案内したこともある。更に、自治体や自治会主催の祭りなど、イベントが開催されるたびにその会場にブースを出展し、広報活動、アンケートの収集などを行っている。これは新東名高速道路のPRにとどまらない。地域間交流の活性化、高速道路整備事業への理解促進、NEXCO中日本というブランドの定着を促す取り組みだという。川治課長はこう説明する。「全社的な経営方針の一つに『社会・経済の変化も見据え

た地域活性化への貢献』がありまして。広報の活動もこの項目に基づいて展開します。社会や経済情勢の変化に伴い新たに生じるニーズを見極め、地域の活性化に積極的に関与していく。それが広報のコセプトにもなっています」。PR館では、周辺自治体の広報誌なども常備している。地元イベントへの積極的な参加も、こうした方針に則ったものだ。

今年度、同社は学生を対象としたPR活動にも力を入れていくという。建設に対する興味を喚起し、社会資本の意義を伝えることで、次世代のリーダーを育成していきたいと川治課長はこう話す。「例えば工業系高校の学生さんなどにもつ

PR館からほど近い川西工事の現場。スマートインターチェンジが設置される予定の現場は、山を1つ削って整地する大規模な土工事が行われている。正面の山肌を登る仮設道路は工事用ではなく、埋蔵文化財の調査のために設けられた。ここで現場の存在感を体感し、PR館で詳細を理解することで、工事の全体像が立体的に理解できる。



左から、新東名高速道路の広報活動を担う秦野工事事務所工務課の板橋沙季さん、川治見課長、柳川真穂さん。来訪者のニーズを的確に見極め、目的に則した解説、案内を心掛けている。いかに地域に貢献、連携するかが大きな課題だ。



と現場を見ていただきたいんです。しかし、待っているだけでは来てもらえません。周辺の自治体にもちらちらお声掛けしてトンネルや橋梁の現場に実際に触れる機会を増やしていきたい。現場は生きた教材ですから。実際に学校へ伺って、社員が教鞭をとる出前講座なども開催しています。そうした活動の繰り返しで、地域への貢献につながっていくと川治課長は話す。

また、韓国、インドネシアなど海外からの視察も少なくない。以前は山岳トンネルや橋梁の施工技術に関する見学が主だったが、最近はいConstruc-tionへの関心も高まっている。そうしたニーズに対応するコンテンツの整備も今後必要になるだろう。そして、広報のもう一つの軸となるのが企業ブランドの向上、定着だ。意外なことに「NEXCO」というブランドは、まだまだ浸透しているとは言いがたいと川治課長は言う。「民営化によりNEXCOという社名になって一〇年以上になりますが、地方によっては『道路公団』と名乗った方が即座

に理解していただけることも少なくありません。そもそもNEXCOとは何をやっている会社なのか、そうした原点ともいえる立ち位置で丁寧な広報に取り組んでいきます」。例えばアンケートの収集は、ニーズを把握するとともに企業のアイデンティティを高めるための施策でもある。「正直なところ発注者として現場をオープンにするという発想はそれほど強くはありませんでした。それが、ここ一〇年ほどで大きく変わった。ゼネコンをはじめ他の民間企業の果敢な取組みに刺激されたという面もあります。発注者と受注者、そして地域との連携を深めながら今後も広報活動を展開していきます」と川治課長は言葉に力を込めた。

特集
建設を魅せる、
現場を識る。

匠の技と心を未来に引き継ぐ 株式会社竹中工務店 ■公益財団法人 竹中大工道具館

摩耗するまで使われ消えゆく宿命にある大工道具。技術革新により、これを使いこなす匠の数も減少傾向にある。ここは、消えていく伝統的な大工道具を民族遺産として収集・保存・展示する日本で唯一の大工道具の博物館だ。収蔵資料は34,000余点にのぼる。道具の展示だけにとどまらず、ものづくりに関わる人の技や心、更にそこから生まれる建築を取り巻く「木」の文化に触れる企画展や講演会、セミナーも定期的に開催している。

上/美しい木の表情を堪能しながら、木の性格を読む匠の技に触れる。
下/多様性と独自性を併せ持つ日本の大工道具を紹介。(提供:(公財)竹中大工道具館)



所在地: 兵庫県神戸市中央区熊内町7-5-1
電話: 078-242-0216
休館日: 月曜日(祝日は翌日)、年末年始
入館料(個人): 一般 500円/65歳以上 200円/大学・高校生 300円/中学生以下 無料

開館時間: 9:30 ~ 16:30 (入館は16:00まで)
アクセス: 山陽新幹線/神戸市営地下鉄「新神戸」駅より徒歩約3分
Webサイト: <https://www.dougukan.jp/>

鉄道施工技術の向上と安全文化の構築拠点 鉄建建設株式会社 ■建設技術総合センター

駅や線路をつくる鉄道工事は列車の運行や乗降客の安全を最優先に行わなくてはならないため、このセンターでは、安全に工事を行うための専門知識や技術を学べる本物と同じ鉄道体験施設を有している。この施設を利用した研修・訓練は、自社だけでなく他社も受講でき、また安全管理と建設技術への理解促進を目的に、大学生の課外授業や視覚障がい者の体験会、海外の技術者研究など、社外にも広く門戸を開いている。

上/教訓を風化させないために過去の重大事故事例を共有する「情報開示館」。
下/全長150mの複線車道と40mのホームなどがある屋外研修フィールド。(提供:鉄建建設(株))



所在地: 千葉県成田市新泉9-1 見学: 団体のみ可(要連絡)
野毛平工業団地内 アクセス: JR成田線「成田」駅/「京成成田」駅よりタクシーで約20分
電話: 0476-36-2371 Webサイト: <http://www.tekken.co.jp/center/>

手と体を動かして、楽しく建設を知る 日本建設業連合会 ■科学技術館「建設館」

東京北の丸公園の科学技術館内にある、日建連がプロデュースする体験型展示施設。ゲーム的な手法でビル建築技術を調べたり、タイムトリップ感覚で国内のダム、橋梁を探索するデジタル建設工房や、タワークレーンの疑似操縦コーナーなど、体験を重視した展示に工夫を凝らしている。また、建造物を「つくる」、災害から「守る」といった視点でスタッフによるワークショップを開催し、主に小中学生から人気を博している。



科学技術館4階にある「建設館」。(写真提供:中原一隆)

所在地: 東京都千代田区北の丸公園2-1
電話: 03-3212-8544
休館日: 一部の水曜日(祝日は翌日)、年末年始※臨時開館あり
入館料(個人): 大人 720円/65歳以上 650円/中学・高校生 410円/子ども(4歳以上) 260円

開館時間: 9:30 ~ 16:50 (入館は16:00まで)
アクセス: 地下鉄東西線「竹橋」駅より徒歩約7分
地下鉄東西線/半蔵門線/都営新宿線「九段下」駅より徒歩約7分
Webサイト: <https://www.nikkenren.com/kensetsukan/>

日建連会員企業の 広報展示施設

日建連は旧日本土木工業協会時代の2002年に「100万人の市民現場見学会」をスタートさせた。開始から3年後に参加者数累計100万人を達成。現日建連発足後は「市民現場見学会」と名称を変え、昨年11月に新国立競技場の現場見学会で300万人を突破した。

会員企業も独自の広報活動を展開している。展示施設の運営もその一環で、各社が保有する技術、歴史などとともに、ものづくりの魅力や社会資本整備の重要性をはじめ、次世代に向けたメッセージを発信している。



古都奈良の景観に融合する情報拠点 株式会社奥村組 ■奥村記念館

2007年に(株)奥村組創業100周年を記念して開設。同社の100年の歴史と保有する技術を紹介する展示スペースを設けている。旅行者が行き交う表通りからガラス越しに建物を支える免震装置の実物を見ることが出来る。過去に発生した地震データをもとに再現した地震動と免震効果を体感する体験装置も設置している。落ち着いた館内は、古都散策時に一息ついていただく憩いの場としても無料開放され、来館者は今春200万人を超えた。



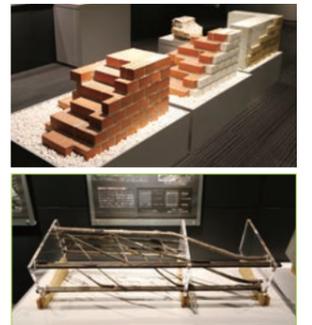
古都奈良の町並みと調和した外観。(提供:(株)奥村組)

所在地: 奈良県奈良市春日野町4 アクセス: 「近鉄奈良」駅より徒歩約10分
電話: 0742-26-5112 JR関西本線「奈良」駅/「近鉄奈良」駅より市内循環バス(外回り)
休館日: 毎月第3火曜日、年末年始 「氷室神社・国立博物館」下車すぐ
開館時間: 10:00 ~ 17:00 Webサイト: <https://www.okumuragumi.co.jp/kinenkan/>

過去から未来へ発展し続ける建設技術と ものづくりの文化—その魅力に触れる 清水建設株式会社 ■建設技術歴史展示室

現在の基盤となる建設技術が導入された明治・大正期は、地震を契機として施工方法や建設材料が大きく進歩した時期でもある。この施設はその時代を象徴する事例をはじめ、展示、映像を駆使して建設技術の歴史を教えてくれる。木材を接合する日本独自の技術、レンガ造から鉄筋コンクリート造への変遷、超高層ビル時代へとつながる鉄骨造の歴史などをたどる。

上/レンガとタイル施工の変遷を実物展示で解説。
下/大正時代の鉄筋コンクリートの鉄筋「カーン・バー」。(提供:清水建設(株))



所在地: 東京都江東区越中島3-4-17 (清水建設株式会社技術研究所内) アクセス: JR京葉線「越中島」駅より徒歩約10分
見学: 希望日の7日前までにメールにて予約 地下鉄東西線/都営大江戸線「門前仲町」駅より徒歩約15~20分
休館日: 土日祝日、年末年始などの定休日 地下鉄有楽町線/新交通ゆりかもめ「豊洲駅」より徒歩約15分
開館時間: 平日9:00 ~ 12:00、13:00 ~ 17:00 Webサイト: <https://www.shimz.co.jp/company/about/sit/showroom/exhibition/>